



## ●色、回想：屋外での色測定

1975年頃アメリカから飛行機で作物の生育状況を調べる技術に関連して地上での放射特性を調査する可搬型放射計を見ました。

日本のリモートセンシング黎明期です。持ち込まれた板状の連続干渉フィルターを使った実験機で、野外での反射率測定を始めました。白板を測定してから対象を測定してその違いから10nm毎の反射率を記録紙上の長さの比で求めました。植生の近赤外でのデータで急に反射率が上がる結果に驚いた方もいました。アメリカから、高価な円形連続干渉フィルターを輸入して少し製品らしくなった試験機の注文を受けたので、新分野の研究に役立てたのだと思います。

最近は色々な分野に関連した「リモセン」で通用するくらい普及してきましたし、可視光以外の領域も重要で、色で判断するよりもバンド毎のデータ比等の研究など「色を見る」色彩学より広い方向に進み、近年は人工衛星のデータを使った放射エネルギーの利用、解析が進んでいます。放射計としては、入射エネルギーをIm/W表示できる校正が必要です。色度座標は、率でも計算しますが、計測器としてエネルギーで表示する様になってきています。(小川 梓)

## ●万葉集のなかの色 - 7

紫草で衣を染める事実が、笠女郎が大伴家持に贈った歌にみられる。

託馬野に生ふる紫草 衣に染め

いまだ着ずして 色に出にけり

笠女郎 (3-395)

佐保河の小石ふみ渡り ぬばたまの

黒馬の来る夜は 年にもあらぬか

大伴女郎 (巻 4-525)

赤駒の越ゆる馬柵の 結びてし

妹が情は 疑ひも無し

聖武天皇 (巻 4-530)

黒髪に 白髪交じり 老ゆるまで

かかる恋には いまだ逢わなくに

大伴坂上郎女 (巻 4-563)

大伴の 見つとは言はじ あかねさし

照れる月夜に 直に逢へりとも

賀茂女王 (巻 4-565)

巻4の509の長歌の中に「青旗」「白雲」の言葉が使われている。

上記の和歌には和歌には、「黒髪」「白髪」があり、「緑児(みどりご)」などの言葉が当時に使われている。

「あかねさし」は万葉仮名では「赤根指」と表記されている。

講談社文庫・中西進・万葉集から(永田泰弘)

## ●大辞泉ひろいよみ 60ーく

**くちなし**：梔子・梔・山梔子。アカネ科の常緑低木。暖地に自生し、高さ約2メートル。葉は長楕円形でつやがある。夏、香りの高い白い花を開く。果実は熟すと黄赤色になり、染料とするほか、漢方では「さんしし」といって消炎・利尿剤などに用いる。名は、果実が熟しても口を開かないことによる。

**梔子色**：クちなシの実で染めた、少し赤みがかかった濃い黄色。襲の色目の名で表裏とも黄色のもの。

**梔子色染め**：くちなし色に染めること。また、その染め物。

**くちば**：朽(ち)葉。枯れ落ちた葉。落ちて腐った葉。落ち葉。朽葉色の略。

**朽葉色**：枯れた落ち葉のような色。赤みを帯びた黄色。襲の色目の名で、表は赤みがかかった黄色、裏は黄色。秋に用いる。

**嘴が黄色い**：ひな鳥のくちばしが黄色いところから、年が若くて経験の足りないことを嘲っている言葉。

**口紅**：化粧のために唇に塗る紅。ルーージュ。器物の縁、特に陶磁器の口縁を赤く彩色すること。また彩色したもの。

**口脇黄ば・む**：幼稚で経験が少ないことを嘲っている言葉。くちばしの黄色い。(永田泰弘)